



Title	建国神話の政治学：檀君神話を中心に [全文の要約]
Author(s)	北山, 祥子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14178号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80073
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Shoko_Kitayama_summary.pdf



[Instructions for use](#)

令和2年度 学位申請論文（全文の要約）

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：北山祥子

学位論文題名

建国神話の政治学—檀君神話を中心に

本論文は、朝鮮の建国神話である「檀君神話」に着目し、植民地期朝鮮において被植民者として侵害されてゆく朝鮮の人びとが自らのアイデンティティとどう向き合ったのか、また植民者である日本人が被植民地の建国神話を否定し排除した論理の淵源を、植民地期朝鮮＝「近代」という従来からの時間軸にとどまらず、長い歴史の営みから捉え直し検討することが目的である。

内容を詳らかにすると、まず檀君は、13世紀末に禅僧一然が書いた『三国遺事』に初出する。その後長い時を経て、20世紀初頭の植民地期朝鮮における最大のイシューとなった。檀君の排除を推進する朝鮮総督府と、これに反発する朝鮮知識人たちとの間に激しい対立が生じたからである。朝鮮史の編纂や国史教科書の改訂を通して、朝鮮総督府が段階的に「檀君神話」を排除していった過程では、朝鮮の人たちのアイデンティティもともに侵害されていった。被植民者である朝鮮の人びとの中でも、一般民衆よりは遥かに発信力があつたいわゆる知識階級のエリートたちは、李朝末期から建国神話としての存在価値が高まっていた「檀君神話」が政治的に排除される状況にあつて、自らのアイデンティティとどう向き合ったのか。また日本人研究者らが、積極的かつ高圧的に被植民地の建国神話を否定し排除の強権を振るうに至った論理の起源はどこにあつたのか。この疑問に対する答えを導き出すために、従来植民地支配という近代に特化した視座から捉えられてきた「檀君神話」を、歴史を遡り検討した。

また本論文は、次の四つの問題関心から議論を進めている。

一つは、建国神話とアイデンティティの問題である。この点に関してアントニー・D・スミスから多くを学んだが、特に示唆を受けたネイションとナショナル・アイデンティティの定義から、「一国一神話化」という新しい枠組みを設定し、記紀神話と檀君神話がいかに国民意識と密接に関わったかを考察した。

二つ目は、史学史論からの視角である。日本の近代歴史学が生んだ実証主義史学＝純正史学、近代以前の歴史学＝応用史学という定義は、単純な二項対立ではなく両者の境界は極めて曖昧であった。近代の歴史教育が専ら応用史学の範疇にあったこと、純正史学における神代史の理解、さらに韓国における「植民史観」が、檀君を排除した実証主義史学だけでなく、応用史学に根差した国史教育も含んでいることを踏まえ、検討を行った。

三つ目は、「檀君神話」の排除を決定づけた朝鮮総督府による歴史編纂プロジェクトの理論的背景である。戦後に歴史学者として知られる中村栄孝は、朝鮮史編纂事業と国史教科書改訂事業をつなぐキーパーソンであった。中村とその周辺の日本人研究者の言説から、檀君神話と記紀神話の理解における齟齬および朝鮮総督府が編纂した『初等国史』における「神代」と「皇室」の扱い、中村が拘泥した「皇室中心の記述態度」と「純正史学」の関係性を明らかにしている。

四つ目は、建国神話とネーション・ビルディングの関係性である。本論文では、ネーション・ビルディングの視座から、近代歴史学と神話の関係、建国神話と国民形成の関係、朝鮮の人びとのアイデンティティについて検討した。

なお時間軸、空間軸は近代や植民地朝鮮にとどまらない。空間軸は、朝鮮半島と日本を適宜往来し、時間軸も朝鮮半島は「檀君神話」が執筆された時期を含む高麗時代、および大韓帝国末期から、「檀君神話」が最大の 이슈となった植民地期朝鮮までを範囲とし、日本は建国神話である記紀神話が成立した奈良時代を起点に、室町時代末期から江戸時代、明治、大正、昭和の近代日本を対象とした。各章の要約は以下のとおりである。

第1章「檀君神話一考」では、本論文全体に関わる檀君神話が記載された『三国遺事』およびその撰者である一然と、朝鮮総督府が正史と認めた『三国史記』および撰進した金富軾について検討を行った。『三国遺事』については、道教や仏教の影響とされる点、一然については「普覺国尊碑銘」の内容から事歴を確認した。一方で『三国史記』は、撰者金富軾の儒教や中国への傾倒、新羅第一主義といった影響が色濃く反映されていることを確認した。その結果明らかになったことは、『三国遺事』、『三国史記』のいずれも、それぞれの撰者が生きた時代や、置かれた環境、そこから生まれた思想の影響を受けていたという点である。金富軾は高麗の武臣ではあったが、彼のアイデンティティは新羅にあった。一然は金富軾と同じ新羅王朝があった慶州出身だったが、それよりも幼くして入った仏教の影響を強く受けたのである。とくに一然の場合、幼少期を除けば、その生涯の大半が戦乱のために国土が焦土化していたうえに、晩年には故国である高麗が事実上蒙古の支配下に置かれるという事態に直面した。一然が高麗人としてのアイデンティティを後世に遺したいと渴望したことは確かである。

第2章「記紀の『一国一神話化』」では、記紀による「一国一神話化」がどのようなものだったかを明らかにした。具体的には、第一に、伊藤博文がドイツ滞在中に神話の力を

体感したことが、記紀採用に影響を与えた可能性があること、第二に、江戸時代末期には「日本人」という国民感情がなかったことから、国民統合のためには神話が必要だったこと、第三に、記紀とは、「特定の家門＝天皇家だけがもっていた神話」だったこと、第四に、大日本帝国憲法は、にわかには日本臣民となった日本人が、天皇制の必然性に疑問を抱かないよう記紀に典拠を置いたこと、第五に、記紀が「一国一神話化」されたことによって抹殺された多くの神話群があったことである。

第3章「檀君神話の所在」は、「一国一神話化」の視点から、植民地朝鮮における国民国家と建国神話の不可分性を考察し、記紀による「一国一神話化」が檀君神話に与えた衝撃を明らかにした。併合前後に頻出した檀君否定論が、記紀の「一国一神話化」による朝鮮人の日本人化、すなわち皇国臣民化を目的としていたことは明白である。しかし、それに対抗した朝鮮人研究者らの檀君擁護論も、実は檀君神話による「一国一神話化」による朝鮮民族の独立という目的があったといえる。一方で朝鮮人研究者から出た檀君神話への批判には、檀君が政治的、宗教的、民族主義的に象徴化されることへの警鐘があり、日本人研究者らの檀君否定論とは根本的に異なっていた。すなわち日本人研究者と朝鮮人研究者の議論は、国民国家と建国神話の不可分性という点において実は同質的であり、日本がもたらした「一国一神話化」の衝撃は、そのまま朝鮮民族が主体となる「一国一神話化」の希求へとつながったのである。

第4章「李丙燾考」では、解放前後を通じて歴史学者として生きた李丙燾における檀君認識を検討した。解放後の李丙燾は解放以前の沈黙を破り、積極的に自身の檀君認識を語り出した。しかしそれは民族主義的というよりは、あくまで実証主義的に檀君をとらえようとしていた。李丙燾による「考古学、民俗学などの隣接学問との協力」によって、「檀君朝鮮以降、三国初期までの韓国上古史の空白を、歴史科学から定立する学界の努力」が必要だという言葉が、その真意を強く表している。「檀君は史実」という発言は、実証主義史学から民族主義史学へと転向を表明したのではなく、むしろ植民地期の1923年に「朝鮮史概構」において明らかにしていた檀君擁護の立場を、実証主義史学者としてあらためて表明したということである。問題は、檀君を肯定すれば民族主義、史実性を疑えば植民史観ととらえる二極化した歴史観にある。

第5章「近代歴史学における『純正史学』『応用史学』」では、根底に「神話」や「皇室」の存在が潜む日本の近代歴史学の産物である「純正史学」、「応用史学」というパラダイムをあらためて整理し、純正史学に内包された応用史学について明らかにした。森有礼によって定義された「純正学」、「応用学」は歴史学にも適用され、「純正史学」、「応用史学」となるが、その目的の大方のところは「純正史学」を確立させるためのものであった。アカデミズム史学では、「応用史学」を差別化したのが、「純正史学」から切り離された「応用史学」は独自に自立化していった。またアカデミズム史学は、「国史教育」を「応用史

学」として位置づけるが、「応用史学」もまた「教育」現場を独擅場に、歴史学の分野に「純正史学」とは異なる「応用史学」を位置づけようとした。しかし「応用史学」論に則る歴史叙述をめぐっては、教育現場に混乱が生じ、「応用史学」論に対する反発も生まれたのである。急進化した「応用史学」論への反発は、教育現場にとどまらず、「応用史学」の内部からもおこり、積極的に差別化を図っていたアカデミズム史学からも出た。「応用史学」論を批判した「純正史学」の中には、「応用史学」論的歴史認識が内包されている。「国史の出発点」を天照大神とする「皇室中心主義」は、自らが批判した「応用史学」の問題点を克服できなかったが、この歴史認識はそのまま朝鮮総督府の中村に継承された。

第6章「中村栄孝考—朝鮮総督府の『国史』戦略—」では、本来歴史学者であった中村栄孝が、朝鮮総督府において官吏としての「仕事」をどのように全うしたのか、また歴史学者という出自が修史官以降の「仕事」にどう関係したのかをその著作から考察し、朝鮮史編纂と国史教科書改訂という連続する二つの事業に関わった中村が、総督府による「国史」の戦略を体現していたことを明らかにした。中村は官吏として常に任務に忠実であり、求められた水準に応え、仕事を全うしたことは明白である。歴史学者としての中村は、その歴史学の学知を自身の専門分野を超え広く活用して、朝鮮総督府にとって都合のいい文章を書き続けたが、そのことこそが総督府による「国史」の戦略だった。また中村の著作からは、当時総督府が朝鮮の人びとを「皇国臣民」化するために、国史の徹底を図ろうとしていたこと、そのためには植民地朝鮮のための教科書が必要であり、それを指導する有能な教員養成が求められていたことがわかる。中村は、こうした総督府の要請に応えられる歴史学者だった。うがった見方をすれば、総督府の戦略遂行は、用意周到だったといえる。「皇国臣民」を作るために必要な国史教科書を編纂する前に、日本の近代歴史学を総動員して『朝鮮史』の編纂を行った。『朝鮮史』の編纂において建国神話を正史として扱わないと決定したことにより、国史教科書に朝鮮の建国を記述する必要はなくなる。これにより国史の主体とは異なる朝鮮関係事項によって権衡を失し、歴史教育の効果を阻害するという問題は、一気に解決した。朝鮮は日本の一地方として、日本との関係史においてのみ記述すればよくなったのである。国史教科書の編纂を終えた中村は、時局の深刻さと歴代天皇の時代を結びつけ書き続けるが、それは総督府による国史の戦略を体現し続けたことにほかならない。

第7章「史実と『史的現象』—『初等国史』における『皇室中心の叙述』」では、根底に「神話」や「皇室」の存在が潜む日本の近代歴史学の産物である「純正史学」、「応用史学」というパラダイムを通して、朝鮮総督府編纂の『初等国史』を史学史上に位置づけることを試み、国史教科書に内包された「応用史学」の排除が目的の『初等国史』が、「皇室中心」、「天皇中心」の歴史叙述に拘泥した結果、結局「純正史学」が持つ「応用史学」的解釈から脱することができなかった実態を明らかにした。

植民地朝鮮では、三・一独立運動の影響によって小学校に歴史教科が導入されるが、教育現場では「朝鮮事歴」の扱いに対する苦慮だけでなく、内地人児童の国史認識の不徹底、内鮮一体に対する理解不足が表面化した。朝鮮総督府は、武家政治中心の勸善懲悪では、植民地朝鮮に暮らす内鮮の人びとの理解を得ることができないというジレンマに陥るが、臨時歴史教科用図書調査委員会を設置し、国史教科書改訂の動きを活発化させた。1938年の教育令改正によって改訂事業は本格化し、担当の中村は植民地朝鮮が置かれた状況と、既存の国定教科書の不備を指摘した。『初等国史』が出版される前年まで、文部省による国定教科書の採用する可能性をほのめかすが、実際にはその改訂を待てないほど植民地朝鮮の状況は深刻だった。『初等国史』では、「内鮮一体」にふさわしくない「朝鮮事歴」の内容が削除された結果、朝鮮史は日本の一地方史となり、日鮮関係史の部分だけが国史として扱われた。実は、朝鮮の建国神話を認めるわけにはいかない事情が朝鮮総督府側にはあった。神武天皇が建国した紀元前 660 年を、遥かに遡る紀元前 2333 年に檀君が朝鮮を建国したとする神話など、断固排除しなければならず、そのためにも「国史の出発点」は天照大神にしなければならなかった。また朝鮮総督府は、応用史学に則った「人物中心主義」の国定教科書を、「国体明徴」には合わないものとして厳しく批判したが、「応用史学」を批判しながらも、「皇室中心の記述」にこだわったあまり、結局は「応用史学」の理屈を借りて『初等国史』を作成した。坪井九馬三が抱いた「国史」と「純正史学」の関係性に対する懊悩は、既存の国史教科書を鋭く批判した『初等国史』によっても解消されなかった。結局は『初等国史』も「応用史学」の荒唐無稽な論理を借りてしか「国史」を成すことはできなかったのである。

以上のように、本論文では「檀君神話」をとおして、建国神話とアイデンティティの問題を検討し明らかにしてきた。本論文の意義は以下の四点にまとめられる。

第一に、スミスが定義した建国神話とアイデンティティの不可分な関係について、「檀君神話」を考察の対象として明らかにできたことである。記紀神話は成立の時点から、ほかの神話を淪滅し、吸収するという「一国一神話化」を図ることで、天皇家というアイデンティティを特別化した。また記紀による「一国一神話化」は明治新政府による日本人の国民化、国民統合にも貢献した。そしてその論理は隣国朝鮮にも及び、「一国一神話化」によって日本人の檀君否定論が頻出することになった。しかし一方で檀君神話もまた民族独立のために「一国一神話化」されていった。建国神話とは、国民であるという自覚、愛国心を生み、団結力を作る起爆剤になるのである。その意味で建国神話とアイデンティティは不可分な関係にあるのである。

第二に、純正史学における史実と「史的現象」の実体を明らかにした。記紀神話はまさにこの「史的現象」という理解によって、戦前の日本において歴史化されたのである。しかし、日本の近代歴史学は、朝鮮の檀君神話の解釈においては「史的現象」を認めなかつ

た。同じ建国神話に対して、根拠のない「史的現象」を一方には認め、一方には認めないというアンビバレントな状況に陥ったのである。これはそのまま、近代歴史学における純正史学と応用史学の分離によって生じた混乱と同質のものであった。

第三に、日本人の檀君認識の起源を、江戸時代初期の林羅山に求めることができたことである。従来徳川光圀による『東国通鑑』が檀君認識の起点とされてきたが、林羅山が江戸時代初期におそらくは朴祥撰の『東国通鑑』を読了し、檀君を認識していたことを証明できた。今回、史料と時間の関係で、文禄慶長の役以前の五山僧による勸進船の足跡はたどりきれなかったが、室町時代にまで檀君認識を遡ることができる可能性は十分にあると思われる。その解明は、今後の課題としたい。

最後に、これまでほとんど研究の対象とされてこなかった中村栄孝と李丙燾に照明を当てることができた。そのうえで両者の歴史観と建国神話に対する考え方を明らかにした。植民者としての中村栄孝は、官学アカデミズムを背景に植民地朝鮮における記紀の一国一神話化を推進するため、檀君神話を歴史の表舞台、すなわち朝鮮史や歴史教科書から排除することに貢献した。一方で、朝鮮総督府や日本人研究者らと深く関わりながら、朝鮮人としての歴史研究を模索した李丙燾は、晩年になって植民地空間においては発することのなかった檀君神話に対する見解を表明し、後進研究者に建国神話研究の推進を託している。中村栄孝については植民地朝鮮における一国一神話化など歴史教育に大きな影響を与えながら、戦後の公職追放の対象にならなかったが、この点の解明ができなかったことについても、今後の課題としたい。なお本論文の主眼は、組織や個人の責任を追究することではなく、植民地朝鮮で起きたことの一部を明らかにすることであった。筆力の問題もあり、内容は複雑で読みづらいものとなるが、植民地期朝鮮の人びとが受けたアイデンティティの衝撃を理解する一助となれば幸いである。